

さいほうとうしゅう

西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂 尊

第八回

11章

もうじゅうせいらい
猛鷺西来

かえい
嘉永二年（一八四九）

除痘館じよとうかんを立ち上げた洪庵こうあんは、破竹はちくの勢いで牛痘接種ぎゅうとうせつしゆに邁進まいしんした。

立ち上げた十一月、「除痘館」の名を記した一枚刷りの引札ひきふだに記載された諸国の分苗所ぶんびょうじよには堺さかい、平野、兵庫、灘なだ、伊丹いたみ、尼崎、池田、米谷まいたに、高槻たかつき、三田、大和郡山、和歌山、丹波たんば、姫路、加古川、小豆島しま、阿波あわ、讃岐さぬき、越前大野えちぜんおおのなど、三十カ所に及ぶ地名があつた。

それは洪庵が、日本各地に散らばつた、適塾てきじゆくの門人もんじんのつながりを駆使くしした成果でもある。加えておさなごの命を守りたい、という崇高な理念と、利益を度外視した熱意に加えて、それまでの医術の秘伝主義を排し、正しい接種法の知識と技術を惜しみなく伝授するといふ、この時代には珍しい、先進的な考え方に依よるところが大きい。

「伝苗式でんびょうしき」を終えた洪庵がほっと一息をついた一週間後、ひとりの男が洪庵を訪ねてきた。

「なんや、えろう高飛車たかびしやなお方が、お供連れでお見えなんですけど」
取り次やえいだ八重やえが言うなり、どかどかと足音が響き、案内を待た
ずに「御免ごめん」という大音声と共に襖ふすまが開いた。

深編ふかあみ笠がさの偉丈夫いじょうぶが、机つくえの書を読んでいる洪庵ふかの前に立った。
その背後には子どもの手を引いた若侍わかざむらいが従っている。

洪庵ふかが書見台しよけんたいから顔を上げると、男は笠を持ち上げ、にっと笑う。

「久しぶりだな、章あきら」

「これはこれは、泰然殿たいぜん、突然どうされたのです？」

その問いには答えず、佐藤泰然はどつかと腰を下ろすと胡座あぐらをか
いて、八重を見上げた。

「なるほど、このお方が章あきらの恋女房こいにようぼう殿か。確かに別嬪べつびんだな。道理で
遊郭ゆうかくに上つても、遊女に目もくれなかったわけだ。しかし、遠来えんらいの
客に茶のひとつも出さんとは、気が利きかないぞ」

「へえ、すんまへん、ただいますぐに」とあわてて八重は姿を消す。

普段の八重は、客人にお茶を出し忘れたりしないが、そもそも普
通の客は、案内なしに勝手に部屋に上がり込んだりはしない。

「何をおっしゃるのです、泰然殿。私は丸山まるやまでは一度も……」と洪
庵はうろたえた。

「確かにその通りだが、遊郭に足を踏み入れたのは事実だろうが。
しかも二度目は自分から進んで、だ」

「そ、それはあまりにご無体な……」と口ごもったところに、八重がお茶の盆ぼんを持ってきたので、洪庵はそれ以上何も言えなくなってしまう。

「ほう、子どもに饅頭まんじゅうとは、なかなか気が利くな。前言は撤回しよう。まさに章にお似合いの、素晴らしい奥方だ」

「それはどうも」ともごもご言った洪庵は、顔を赤らめうつむく。

やはり泰然とはどうにも合口あいくちが悪い。

泰然はお構いなしに、供として連れてきた青年を指さして言う。

「コイツは神保良肅じんぼりょうしゆくといい、佐倉藩の藩医の子だが、なかなか優秀なので適塾で修学させようと思つて連れてきた。外科の知識は一通り仕込んであるから、適塾流で鍛きたえてやってくれ」

隣となりの青年は黙って頭を下げる。その控ひかえめな所作しよさには好感が持てた。

泰然とは合口が悪いのに、泰然を取り巻く人物とは相性がいいのは不思議なものだ、と洪庵はしみじみ思う。

部屋の外になにやら人の気配がしたので、泰然は立ち上がると、襖を開け放った。

すると襖の隙間すきまから、部屋を覗き見していた塾生たちが、部屋になだれ込んできた。

塾生たちをじろりと見た洪庵は、一喝いつかつする。

「学問に休む間なし、こんなことで時間を無駄むだにしてはいかん」
「申し訳ありません」

塾生たちは口々に言いながら、蜘蛛くもの子を散らすように、姿を消した。

再び、どかりと胡座をかけた泰然は、にっと笑う。

「相変わらずの堅物ぶりだなあ。だが『東の和田塾、西の適塾』と並び称されるだけのことはある。おいらと章の勝負は、とりあえず引き分けということにしておいてやるよ」

洪庵は「それはどうも」と言って頭を下げながら、続ける。

「まさか、泰然殿は、そんなことをおっしゃるために、わざわざ大坂までお見えになったのですか？」

「馬鹿言うな。おいらも、そこまでヒマじゃないさ。今日はいつぞやの、長崎での貸しを取り立てるためにやって来たのさ」

そう言うと、隣で饅頭にかぶりついている少年の頭を撫なでながら泰然は言い放った。

「おい、章、おいらに牛痘とうびようの痘苗よこを寄越せ」

洪庵は思わず目を見開いた。

「なんと、浪速なにわで痘苗を得たことをもうご存じとは、さすが早耳はやみみですね。除痘館を立ち上げてまだ一週間しか経っていないというのに」

「おいらは『早見え泰然』だからな。『早耳頭巾ずきん』は洞海とうかいの方で、ヤ

ツが聞きつけてきたのよ。だからどういう経緯かも、わかってるのよ」

そう言つて泰然が語り出したのは、洪庵もよく知らない、江戸経由の佐賀藩さがの動きだった。

「蘭館の医師モーニケが持つてきた牛痘の苗が長崎に到着すると、かねてより藩主・鍋島直正なべしまなおまさ侯から痘苗取り寄せの命を受けていた長崎在の藩医・榎林宗建えのらばやしそうけん殿はこれを得て、自分の孫や通詞の関係者に痘漿とうしよう（膿うみ）を植えた。八月六日、これが無事に善感したので佐賀在の藩医・大石良英おおいしりょうえい殿が、藩の家中及び領内の者に接種させ、安全性を確認した。それを早馬で伝えられた江戸詰めいとうげんぼくの伊東玄朴いとうげんぼく殿が、藩主の次女に痘苗を試植した。するとやはり善感したので、長女みつの貞姫ひめ殿にも接種した。このように、佐賀藩に関わりを持つ蘭医が総出で成し得た快挙だ。ところがその後、京にも痘苗が届いたと聞いた。それなら章が手に入れているに違いないと踏んだのよ」

「ご明察です。恐れ入りました」

洪庵が、泰然の情報の正確さと速さに舌を巻いて頭を下げると、泰然はふん、と肩をそびやかす。

「この程度で恐れ入るとは、章はおいらをナメちやいねえか？ あるいは、適塾があまりにも繁盛しているもんだから、いい気になつて少しボケたかな。いいか、『早見えの泰然』の本領はこんなもんじ

やねえ。耳をかつぽじってよく聞けよ。そもそも、今回の件は、牛痘輸入なんぞに留とどまらない。世の中にとんでもない大きな影響を及ぼすことになるだろうよ」

「と申しますと？」

「榎林家は、二代栄哲殿えいてつの時から長崎の鍋島屋敷の出入り医を務められ、家督を継いだ、孫の宗建殿は永代長崎居住のまま医業をしている。そんな自由な立場を存分に活かし、鍋島侯に蒸気船や蒸気機関車製造の絵図を献上し、西洋砲術、大砲鑄造法ちゅうぞうほう、航海術、物理、化学、医学など諸分野の洋書を取り寄せた。宗建殿の教導により佐賀藩は、他藩に先駆け反射炉はんしゃろを鑄造し、洋式船を十隻以上保有し、兵器製造にも乗り出している。宗建殿はいわば佐賀藩主の智恵袋よ。だが聞いて驚くな、今のおいらは宗建殿と同じように、佐倉藩の英明君主・堀田正睦侯を教導しているよ。どうだ、恐れ入ったか」

洪庵はぼかんと口を開けた。

今の洪庵は、いかに種痘事業しゅとうを広げていくかの一事で頭の中は一杯だった。そこにいきなり蘭学がもたらす藩政への影響力など聞かされても、さっぱり理解できない。

だがそんなことはおくびにも出さず、ぼんやりした口調で言う。「でしたら、玄朴殿に痘苗を譲っていただければよかったのでは？」

当然すぎる洪庵の指摘を聞いて、泰然は顔をしかめる。

「章よ、おいらがここまで滔々とうとうと話したのに、何が言いたいか、ちつともわからなかったみたいだな。とどのつまりは、そんな宗建殿やおいらと比べれば、いくら江戸でしているといえど、玄朴殿など塵芥ちりあくたのようなもの、屁への河童かわづむだということよ」

なぜにここで突然、玄朴殿の悪口になるのか、洪庵にはどうも釈然しやくぜんとしない。ただ、泰然殿は玄朴殿が本当にお嫌いなのだな、ということだけはよくわかった。

「それに玄朴殿は、牛痘の分苗の際、べらぼうな金子きんすを吹っかけやがるというウワサだな。その性根しやうねが気に入わんのだ」

「しかし金子で解決するというのは、泰然殿の方がお得意なのでは？」

泰然は、ちつ、と舌打ちをした。

「章はすっかりすれちまって、つまらぬ浅知恵を働かせるようになつちまったもんだな。仕方ない、本音をぶつちやけるしかなさそうだな。実は先年、次男の順之助じゆんのすけを佐倉に呼び寄せて、手元で鍛え上げきたてから、良りようさんのところの養子に出したんだ。今は松本良順りようじゆんと名乗り、いづれ御典医ごてんいになれそうなんだが、今、おいらが玄朴殿に何かを頼んだりしたら、順の字を人質にされちまいそうで、それがどうにもイヤなのよ。かと言って長崎通と言われるおいらが、最新の痘苗を手に入れられないなんて名折れだ。さて、どうするかと思

案していたところに、章が大坂で種痘所の立ち上げに動いていると耳にしたわけさ。この伝手を使わない手はないと思って、すぐさま佐倉を発ったわけよ」

「それはまた大胆な……。万が一、私のところが不首尾で空振りに終わったら、どうなさるおつもりだったのですか？」

泰然は、にっと笑った。

「その時は京の栄建殿にねじ込もうと考えていた。宗建殿の実兄だから、痘苗を手に入れていろいろと踏んでな。それにおいらが江戸に連れ帰った三宅良齋は栄建殿の愛弟子だ。おいらは良齋を佐倉藩の召し抱えに取り立てる手配をしてやった。弟子の面倒を見てやっているのだから、イヤとは言わせねえよ」

さすがの二枚腰、転んでもただでは起きぬ御仁だな、と洪庵は半ば感心し、半ば呆れた。

「しかしその伝で行けば、今頃は大井川を越えるあたりなのでは？」

「相変わらず章は頭が固いな。浪速に下るには陸路と水路の二通りある。水路なら一週間だ」

「またも得意げに言う。洪庵は吐息をついた。

「わかりました。恩義ある泰然殿の頼みゆえ、分苗はいたしましう。ただしその際、当館では事前に講義を受けていただき、分苗免状を発行することになっております。分苗の費用はいただきますせん

が、絶苗した場合は金二百疋にひやつひきを収めていただきます」

泰然は立ち上がると腹に巻いていた胴巻きをほどき、ばらばらと小判をまき散らした。

「しゃらくせえ。これは絶苗うんたらかんだらの前払いだ。釣りはいらん。改まった講義だの免状だの、おいらがそういう、まだるっこしいことが大の苦手なのは、よく知っているだろうが」

まばゆい小判の金色の輝きを眺めながら、洪庵は一步も退かずに言い返す。

「しかし絶苗だけは絶対に避けていただきたい。講義はそのためにするのです」

そう応じると、打てば響くように、泰然の江戸っ子の巻き舌風の言葉が炸裂する。

「心配するな。おいらが大嫌いなのは無駄と損をすることで、得意なのは金儲けができる新しい仕組みを作ることだ。そんなおいらが絶苗なんていう間抜けなことをするはずがなからう」

実は、以前佐倉藩で試みた人痘種痘じんとうでは絶苗させていた泰然だが、そんなことはおくびにも出さずに、平然と言い放つ。

ご自分の都合ばかり言い立てる性急さは、昔とちつとも変わらぬのだな、と洪庵は苦笑した。

「わかりました。仕方ありません。大恩ある泰然殿ゆえ、特別待遇

させていただきます」

「よし、そうこなくちやな。それでこそ西の雄・適塾の大親分だぜ。そうと決まれば、さっさとこの子に痘苗を植えてくれ」

泰然が連れてきた子どもは、饅頭をたらふく食べて腹がくちくなつたのか、泰然の膝の上で、すやすやと寝息を立てている。

その子の寝顔を見ながら、洪庵は言う。

「残念ながら、そういうわけにもいかないのです。種を植え継ぐには時期がございませう。前回の種痘から一週間経つた、水痘期にならないと、継痘はできないのです。けれども幸いなことに明日は、痘苗を植えた子呼び戻し、苗床にする七日目に当たります。ですので明日、支度が調いましたら宿に使いの者をやりますので、お子をお連れになつてください」

「そうしてもらえるとありがたい」と言つた泰然が宿の名を告げると、洪庵は別れ際に、世辞のつもりで言う。

「和田塾の盛名は、浪速にも伝わっております。今は洞海殿が主宰されておられるとか。あの方の蘭語の力量を以てすれば、当然かと存じます」

泰然は、ふん、と鼻先で笑う。

「それはそうなんだけども、おいらが佐倉に引っ込んでからは、和田塾はただのつまらん蘭学塾に成り下がつちまつたんだよ。だから

おいらは、佐倉で順天堂じゆんてんどうという新しい医学塾をこしらえたんだ」

「佐倉で立ち上げたのは、蘭学塾ではなく、医学塾なのですか」

その問いは、長崎で同時期に学んだ頃からずっと泰然たいぜんに抱いだいてきた、違和感に対する根本的な問いかけになっているようにも感じた。

「その通りよ。蘭書を紙魚しめのように貪むさぼるばかりでは、生命の核なんぞ掴めやしない。書物は実技を補うために読み、全ては患者の実から学ぶべきなんだ。特に外科つてのは、理屈じゃねえからな」

一気にそう言って、泰然はにやりと笑う。

「せっかくだから順天堂の教科書を見せてやるよ。目ん玉かつぽじつて見るがいいさ。章はこういうのが大好きだろ？」

泰然は、手荷物の中から「接骨備要せつこつびよう」という冊子を取り出した。

著者は佐藤泰然とある。

「そいつはセリウスの外科書から、脱臼だつぎゆうに関する部分を抜き書きしたもんだ。形の上ではおいらが訳したことにしてあるが、大部分は洞海にやらせたんだ。けれども佐倉順天堂で使う教科書なら、おいらの名にした方が都合がいいって洞海の野郎が言いやがるから、そうしたのさ。いずれセリウスは養子たかなかの尚中たかなかに全訳させようと思ってる。コンスブルックの治療書も使い勝手がいい。薬理やくりは洞海に訳させたワートルの『薬性論やくせいろん』が群を抜いている。けどよ、わからんちんのお上かみが、翻訳書刊行の決定権を医学館ゆたに委ねたりしたもんだか

ら、版木はんぎでの印刷は取りやめになっちまった。まあ、順天堂で教科書に使っているから、一向に差し支えはないんだけどな」

泰然が滔々と喋るのを聞いた洪庵は呆然ぼうぜんとした。

泰然が早口でずらずらと並べ立てた蘭書には、洪庵が日頃から使っている蘭書もあるが、初めて聞いたものや、耳にしたことがあるものの見たことはない書物の名前もぼんぼん出てきた。

一体、このお方の目は、どれほどの書物を見通しているのだろう。

洪庵は背筋が寒くなった。

「章がフーフランドの大著を翻訳したのは聞いているよ。『病学通論』もなかなか見事な仕事だな。だが医の倫理やら理屈が先に立ちすぎて、おいらにはまだるっこしすぎるんだよ。おいらは、そういう屁理屈をすつ飛ばして、手っ取り早く、すぐに役に立つ医者を育てたいんだ。だからこんなことも考えたんだぜ」

渡された書状には、洪庵がこれまで見たこともないような文言が並んでいた。呆然とする洪庵に、泰然は得意げに言う。

「そいつは手術しゅじゅつの承諾書しょうかくしょってヤツだよ。手術で問題が起こっても後で訴えないと約束させ、かかる費用も事前に知っていることを認めさせる覚書おぼえがきさ。まあ、要は、手術に失敗した時にもとかく言わせず、払うものをきちんと払ってもらうための念書ねんしょのようなんだな」

「それでは『医は仁術じんじゆつ』のそこころに背くのでは？」

「そんな辛しん気きくさい言葉、おいらはとうの昔に捨てたよ。そもそも患者かん者じやってヤツは病び気きになると医い者じやにすがり、元げん気きになつたら知らん顔か、そのクセ、治療ちりやうがうまくいかなければ医い者じやを責せめる。これからの医い者じやは、自分で自分の身みを守まもらなくちやなんねえのさ」

「それはあまりに傲ごう慢まんな……」

「そんな古ふる臭くい考こうえに囚とらわれているから、章ちやうの医い院いんは大だいしたことがないんだ。どうせここは、流は行やつちやいないんだろう？」

泰たい然ぜんに、ずばりと痛いたいとこを突つかれ、洪こう庵あんは黙もくり込む。

「そんな調てう子しだと、こつちを見みたら腰こしを抜ぬかすぜ。『療りやう治ち定てい』といつて、治療ちりやうのお代しろを決けめた品ひん書しよきさ。手て間まがかかれば手て間ま賃ちんをもらうのは当然たうぜんだ。傷きず口ぐちの処ぢ置しは、傷きず口ぐち一いっ寸すんにつき金きん百ひゃく疋ふ、お産うぶは金きん二に百ひゃく疋ふ、割か腹ぶくして胎たい児じを取り出だすのが一番いちばん高たかくて十じゅう両りやうつてとこだな」

洪こう庵あんは頭あたまをがっつん、と殴うられた氣きがした。

死亡しつじやう時ときの埋まい葬そう用ようの寺てら送そうり手て形がたまで用よう意いさせているのを見みて、洪こう庵あんはもはや言ご葉えもない。

そこには医いは仁に術じゆつだと思おい込こんでいた自分の常じやう識しは、かけらもない。

「因ちなみに先せん月げつには、義ぎ理りの兄あにの山やま内うち豊とよ城じやうの『たたま取とり手て術じゆつ』も差さ配はいしたんだぜ」

「たま取り、と言いいますと、鞆たう丸まる摘と出し術じゆつですか」

「その通り。おいらが江戸に出張^でって診察し、戸塚静海殿に林洞海、三宅良斎を加えた執刀陣^{しつとうじん}を手配し、玄朴殿に指示役をさせ、竹内玄同殿^{どう}が薬物係、大槻俊斎殿^{おおつきしゆんさい}に参考蘭書を読ませながら、寧丸を摘出したんだ。蘭学仲間の勢力を大結集した大事業よ。兄者は『玉とり日記』なんてのを書き、『鬱陶^{うつとう}しくなくなってせいせいした』なんて言^まってご満悦^{まんえつ}さ。その時には、この手術承諾書と代金表を流用したんだが、兄者は文句ひとつ言^まわなかったぜ」

泰然^{ひょうひょう}は飄々とした口調で、棚^{たな}に置いてあつた紙片^{しへん}を取り上げて言^まう。

「どれ、章が作った塾則を拝見するか。ほう、四角四面の堅物にしては、この程度の締め付けで済ませたのは、上出来だな。自分は生臭坊主のクセに真っ先に禁酒禁欲^{うた}を謳^{うた}う玄朴殿とはえらい違いだ。だが何だ、こんなバカ安い束脩料^{そくしゅうりょう}は。玄朴殿のところの半分以下じゃねえか。こんなんでやっていけるのかよ」

「ええ、何人かの藩主さまのかかりつけ医に任じられたので、今のところはなんとか」

「そんなこつたろうと思つたよ。昔から章はクソ真面目でいけねえや。医術も塾も同じ、生き物のようなもんだ。身を削^{けず}つて弟子を育てても、師匠が痩^やせさらばえたら何にもならねえぜ。幹^{みき}が枯れちまつたら、枝だつてダメになつちまうんだからな」

洪庵は咳払いせきばらいして、反論する。

「ゆずり葉、のたとえもありますか？」

「おいらは枯れ葉となつて肥やしになるなんて辛気くせえのはまっぴら御免だよ。佐倉順天堂は高い授業料を取つて、質の高い授業をする。それがおいらの方針さ」

学塾の経営は洪庵の悩みの種だった。泰然はその問いに、きわめて明快な回答を与えた。

だがそうしたやり方は、洪庵には絶対に選択できないだろう。

そのことはふたりとも、よくわかつていた。

泰然は手元のお茶を飲み干すと、あっさり話題を変えた。

「それより考えておこなくちやいけないのは、後の心配だな。ゆずり葉のたとえじゃないが、後継者が重要だぜ。その点でもおいらは完璧さ。山口舜海しゆんかいという、とびっきりの麒麟児きりんじを手に入れたからな。これで順天堂は未来永劫えいごう、安泰あんたいの万々歳だ。章よ、お前はこの塾を任せられるような駿馬しゆんめを得たか？」

泰然は胸を張り、洪庵の顔を覗き込む。

洪庵はしばし考えて、八重を呼んだ。

「お客さまに、お茶のお代わりを。それから蔵六ぞうろくを呼びなさい」
やがて現れた青年を見て、泰然は手を叩いて喜んだ。

「おいおい、七福神の福祿寿ふくろくじゆみたいに長い頭じゃねえか。コイツは

春から縁起がいいや」

すると塾頭じゆくとうの村田蔵六は、にこりともせずと言う。

「今は十一月、春の始まりの立春は四カ月も先であり、本格的な春となりますと、公転周期でいえば春分の日の前後となるのであります。したがって『春から』という言葉遣いづかはまことに不適切と言わざるを得ないのであります。また、縁起がいい、というのも非科学的な妄言もうげんであり、その根拠はいずこにもないのであります。あなたが先ほど発した言葉は、射出角度を間違えた砲弾ほうだんのようなもので、それでは私の陣営じんえいにはとうてい届きません」

滔々と語る蔵六の、激しくも珍妙ちんみょうな響きの言葉を聞いて、洪庵は笑いかみ殺す。

——珍しく激げきしておる。さては福祿寿と言われたのが氣に障さわつたな。絶句した泰然を見て、洪庵は蔵六に言う。

「勉強の邪魔をしてすまなかつたね。下がっていいよ」

蔵六は、泰然を一瞥いちべつすると、洪庵に一礼して辞去した。

泰然は、毒気を抜かれたような顔をして、ほう、とため息をついた。

「いやはや、こいつはおったまげたな。章以上に四角四面で杓子定規ぎなヤツが、このむさくるしい塾じゆにいるとは思わなんだ。いや、むさくるしいから、あんなのを匿かくまっておけるのか、ま、どっちでもい

いや。あんなへんてこなヤツを飼っているとは、章も度量がでかくなつたもんだ

「私は蔵六を飼っているのではなく、私が蔵六を始めとする塾生たちに養われているのです。彼のさいづち頭の中には医の知識だけでなく、天文学から兵術まで森羅万象しんらばんしやうが詰まっています。医家として患者の受けはよくないのですが、いつの日か、大きなことを成すでしょう」

「四角四面に見せながら、相手の弱点を冷静に見極め瞬時に対応するなんて、なかなかできるこっちゃねえ。確かに何かをしでかしそうな雰囲気はあるな。いずれは一廉ひとかぜの兵法家として、蘭癖らんへき大名に重用されるようになるんじゃないかねえかな」

泰然は、そんな予言めいた言葉を口にした。

「わかった。佐倉順天堂と適塾の一番弟子同士の一騎打ちも、引き分けということしておいてやるよ。そうだ、ついでに手土産でこれも寄越せ。順天堂の廟堂びやうだうにも掲げてやる」

泰然が指さしたのは床の間の掛け軸だった。

それは「扶氏医戒ふしいかい」という、医の倫理を説いたもので、洪庵が塾生に暗誦あんしやうさせていたものだ。

「もちろん差上げますが、泰然殿が、かような文言に興味を持たれるとは意外ですね」

洪庵が皮肉めかして言う、泰然は肩をすくめた。

「おいらの好みじゃないが、そういうのを必要とする塾生もいるんでね。洞海あたりは涙を流して喜ぶだろうよ。さて、長々邪魔したな。宿で使いを待っている。そうそう、別嬪の奥方にもよろしくな」
そう言って深編み笠を被った泰然は、眠っていた子を起こすと、一緒に立ち去った。

供として付き添ってきた若侍が、後にぼつんと取り残された。

結局今日は主人の泰然から、最初にひと言紹介されただけで、その後はひと言も触れてもらわずじまいだった挙げ句、置き去りにされ、これからどうするかも何の指示もされていない。

それまでひと言も口を利かなかった若侍は、居住まいを正すと、洪庵に一礼をする。

「わたくし、神保良肅と申します。ふつつか者ですが、精一杯学業に励むつもりですので、ご指導のほど、よろしくお願いいたします。あの、それと泰然先生がおっしゃるには、束脩料などは先ほどの金子から当ててくれ、とのことでした……」

洪庵は苦笑すると、再び塾頭の蔵六を呼び、神保の入門を告げ、案内するよう命じた。

翌日、洪庵は、泰然が連れてきた子どもに、牛痘とうしやうの痘漿とうじょうを植えた。

別れ際、洪庵は泰然の目の前で、磁器の壺に瘡蓋を入れ、蠟で封をして手渡した。

「この壺の中に瘡蓋を二個入れて、蓋を蠟で密封しました。夏場は三年、冬場なら五年は変質しません。日の差さないところで清潔に保ち、火気や湿気は避けてください。万が一のための予備です」

「絶苗は絶対しないと云つとるだろうが。まあ、せつかくだから頂戴しておくが」

むすっとした表情でそう言いながら、泰然は壺を両手で受け取ると、目を細めた。

「ほう、なかなか雅趣のある壺だな」

「そうでございますよ。長崎を辞す際、唐通事の穎川四郎八殿から人痘の瘡蓋を戴いた時に、餞別に頂戴した青花の壺でございますから」

「しかし章よ、金を取らずに分苗するなんて、いかななものかと思うぞ。江戸では玄朴殿が相当いい値を取ってちまちまと分苗し、あこぎに稼いでるって噂なのによ」

「私には、そうしたことは出来かねます。この医術で儲けが出たらその時は、それは種痘を広げるための原資として用いる、ということとは分苗していただいた、京都の日野鼎哉殿と福井藩の笠原良策殿の意向を受け継いだことであり、この除痘館を立ち上げた時に、社

中の皆と誓ったことでもあるのです。種痘は、世のため人のため、行なわれなければなりません」

泰然は肩をすくめた。

「わかったわかった。いくら口を酸っぱくして説いたところで、頑固者の章には無駄なのは重々承知の上さ。それを聞いて思いだしたが、江戸には、章と入れ違いで『日習堂』にっしゅうどうに入塾して、章を尊敬していると言って憚はばからない、要領の悪そうな変わり者がいるそうだぜ」

「ほう、それは興味深いお話ですね。何というお方ですか？」

「桑田立齋くわたりゅうさいといい、年の頃も章と同じくらいかな。深川ふかがわで小児科を開業したが、玄朴殿に掛け合って痘苗を手に入れ、種痘所を始めるらしい。強欲な玄朴殿から無料で牛痘の苗をむしり取ったつてんだから、かなりのやり手だぜ。縁があつたら、章のことを伝えておいてやるよ」

「日習塾」がある深川で開業した同窓なら、信頼できる医者に違いない。

また、その逸話いっわからは、なんとしても種痘を推し進めたい、という強い思いが感じられ、頼もしい。心強く思った洪庵は、泰然に礼を言った。

泰然は「いいってことよ」と、片手を挙げ、痘苗の子どもを連れ

て立ち去ろうとした。

だが何を思ったか立ち止まり振り返ると、洪庵に言う。

「迷っていたんだが、やっぱり章には伝えておいた方がいいだろうな。実はお尋ね者の高野長英殿が、葉で顔を焼いて別人の成りで江戸に舞い戻ってきて、佐倉にいるおいらを頼ってきた。江戸で暮らしたいなんて言うもんだからやむなく、薬研堀の和田塾の近くに住まいを見繕って差し上げた。その手配の合間に玄朴殿の動きを見聞き、兄者の玉とり手術も差配したんだよ」

驚いて、洪庵が泰然を見つめると、泰然は照れ笑いを浮かべる。

「ま、窮鳥懐に入らずんば、というヤツだが、おいらもずっと江戸にいるわけではないから、面倒はみてもらえない。くれぐれも目立たぬように、と釘を刺しておいたが、はてさてどうなることや

ら」

「獄中で『蛮社遭厄小記』などという、世を騒がせるような物騒な書を執筆されるようなお方が、こんなに揺れている世で、おとなしくしていられるとも思えません」

「そうなんだよな。まあ、その時はその時、かな」

そう言った泰然は大きく伸びをした。

「なにかと面倒なお方だが、長英殿に関しては、おいらと章の因縁の始まりでもあるから、伝えておくのが筋かな、と思ったもんでな」

「私にも大坂奉行おさかぎょうからお尋ねがありました。江戸の前はどちらにいらしたのですか？」

「各地を転々としていたそうだ。九州や中国地方にも一時滞在したが、最終的には宇和島うわじまで二宮敬作殿にのみやけいさくの世話になっていたそうだ。二宮殿は鳴滝塾なるたきじゆくの同窓だし、シーボルト先生の娘のイネ殿の面倒を見続けているような、律儀りちぎで義理堅いお方だ。シーボルト先生にさつさと見切りをつけてトンズラした長英殿とは正反対なのに、なぜか二人はうまが合うらしい。宇和島藩主だてむねなりの伊達宗城殿は蘭癖大名だから、相当厚遇こうぐうされていたらしいぜ」

「そんな好待遇の地を離れるなんて、何があつたのですか？」

「隠密おんみつに嗅かぎつけられたんだそうだ。その時、世を変えるには日本おんみつのど真ん中の江戸にいないとダメだと悟さとって、戻ってきちゃった。

そういえば宇和島では、長英殿の後釜あしがまの蘭学者を探しているそうだから、章も気にとめておいてくれ。因みに昨日も言ったが、おいらは今、佐倉で西洋兵学の手ほどきの真似事もしていて、むしろそっちの方が本業ほんごうみたいになっちゃった。なんとしても堀田さまに日本を導いていただきたいという一心なんだが、本音を言えば、兵学はきな臭いからつかず離れずで、医学中心でやっていきたいんだよな」

不思議なことに、泰然とはいろいろなことで機縁が重なる。

今回も、牛痘を世に広めるといふ試みが一致している。

ただしその方向性は、正反対のことが多いのではあるが。

「兵学には手を出さず医術に専念したい」という泰然の言葉は意外な感じがした。

それは洪庵と同じ志向だったからだ。

こうして洪庵にさまざまな余韻よゐんと波紋はもんを残して、泰然は飄然ひょうぜんと浪速を去った。

佐倉で唐突とうとつに、藩を挙げての牛痘種痘が始まったのは、それから半月後の十二月初旬のことだった。

江戸城の人々は、「さすが蘭癖大名の堀田侯、蘭方の妙薬みょうやくを魔法のように手に入れおったわ」と互いに目配せめくばをし合っただった。

*

大坂除痘館事業すべの滑り出しは上々だった。

翌嘉永三年かえい（一八五〇）一月は、洪庵にとって、一世一代の晴れ舞台が訪れた。

足守藩主あしもりはんしゆ・木下肥前守利恭きのしたひぜんのかみとしやすに直々に、藩内での種痘の実施を命じられたのだ。

洪庵は折ある毎に、藩医いしざかそうきの石坂桑亀と連絡を取り合っていた。そして大坂除痘館しらの設立を報せると、直ただちに桑亀が藩主じまに直訴せしたので

だった。

洪庵は足守出身の塾生、山田禎順ていじゆんと、足守に近い津山藩出身の菊池秋坪ちしゆうへい（後の箕作秋坪みつくり）、泰然が連れてきた佐倉藩の神保良肅など数名の塾生を引き連れ、荷運びの数名の人足と、種痘を植えた直後の子二人という大人数で西国橋さいこくばしから備前船びぜんに乗り込んだ。八重と塾頭の村田蔵六、義弟の緒方郁蔵おがたくぞうが河岸から、洪庵の立見しゆつたつを見送った。足守に着くと洪庵は木下侯にお目通りし、姫君や重臣の子息に種痘を行なった。

その手際によさにいたく感心された木下侯が、「足守にも『除痘館』を設けよ」と直々にお命じになった。

こうして洪庵の実家近くの川崎町の屋敷に「足守除痘館」を構えることになった。洪庵が館長になり、門人・山田禎順の父の山田元珉げんみんを補助とした。こうした順調な広がりはんといつても、最初に藩主の子が接種を受けて、範はんを示したことが大きかった。

洪庵は、この晴れ姿を、ひと目父に見せたかった、と思った。

だが、代わりに母が大層喜んでくれたので、十分報われた思いだった。

ちようどその頃、義弟の緒方郁蔵は、適塾の蔵書六冊の中から、牛痘の記述部分を抜き出し「散花錦囊さんかきんのう」として「乾けん」「坤こん」二分冊の小冊子にして刊行した。

足守ではこの書を、種痘を学ぶ医師に書写させた。そこにはかつて郁蔵と机を並べて学び、その才能を囑望しよくぼうされながら、故郷で医業を開くため退塾した山鳴剛三も駆けつけて、洪庵と再会を喜んだ。だが洪庵から種痘の手引書として、緒方郁蔵が編纂した「散花錦囊」を渡されると、山鳴剛三の表情に陰りが走った。

修学を途中で放棄した剛三は、村医者でくすぶっていた。互いに切磋琢磨せつさたくましていた親友の緒方郁蔵が洪庵の義弟になり、「独笑軒どくしょうけん塾」を主宰し、訳本を数多く出していることに、忸怩じやくじたる思いを強めたようだった。

剛三がしばし無言だったのは、かつて競い合って学に励んだ大戸郁蔵が、今では手の届かないところに行ってしまったことを噛みしめていたからだろう。剛三はふと、前書きの署名に気がついた。

「有馬撰蔵ありませつぞうも、この書の編纂に関わったのですか？」

「そうだ。だが撰蔵は亡くなってしまった。その文は、郁蔵がどうしても、というので冒頭に載せたのだ。名文だろう？」

剛三は目を瞑りつむ、うなずいた。瞼まぶたの裏に、適塾が立ち上がった頃に大戸郁蔵と有馬撰蔵、山鳴剛三の三人で、互いに切磋琢磨していた日々が浮かんだ。

彼の頬を、涙が一筋流れ落ちた。

彼を哀れんだ洪庵は翌二月「葵ヶ岡除痘館あおいがおか」を創設した時に、責

任者に剛三を任命した。そして菊池秋坪と神保良肅を補助につけた。こうして足守藩の全面的な協力を得て、三月までに藩内の小児千五百名に接種した。

その後も、日本の各地から分苗を求める声あいつが相次いだ。

梅雨時までに医師六五名が除痘館を訪れ、分苗を受けた。

以後、分苗を願い出た医師には接種技術の研修を義務づけた。ここでは牛痘感染の真仮しんかの鑑別法を洪庵が教授した上で、免状を与えて請状うけじょう（誓約書）を取った。

そこには仁術じんじゆつの本意を守るという趣旨が盛り込まれていた。

手引書として緒方郁蔵の「散花錦囊」二分冊が配られた。

そうした手法はかつて、「合水堂がっすいどう」の華岡南洋が洪庵に相談してきた時に確立した、秘伝公開のやり方を参考にしたものだった。

分苗は痘漿を用いるのを基本としたが、遠隔地には瘡蓋を送ることにした。こうした洪庵の差配は懇切丁寧こんせつていねいで細部までよく考えられた行き届いたものだったので、大坂除痘館の評判はいよいよ高まっていた。

このように一見すると順風満帆に思われた除痘館事業だったが、そこから苦難の日々が始まった。痘苗の植え継ぎは難事業だった。子どもに牛痘を接種すると三日後に善感を判断し、一週間後に水疱すいほう

が潰れる時期に、善感した子を種痘所に呼び、片袖かたそでをまくりたすきを掛け、腕を綱で吊るし一日中、次に植え継ぐ子のための苗元にす
る。

それは幼い子どもには耐えがたいことであっただけでなく、牛痘の種を植え継ぐために、未感染の子どもを確保しなければならぬ。

そのために、時には菓子や金子を与えることすらした。

除痘館を維持する困難さは、最初の京都除痘館てんまつの顛末を見れば明らかである。

関西における日野鼎哉の影響は大きかった。特に朝廷の信任が厚かったことは、種痘に関し好影響をもたらすこととなった。

嘉永二年、種痘を始めて僅か二カ月の間に、皇后を始め有栖川宮ありすがわのみや親王しんのう、公卿殿上人くぎょうてんじょうひとなどを含めた三百人に種痘を施ほどこしたという。

だが鼎哉は狷介けんかいで頑かたくなところがあり、人々と和することを拒こぼんだ。

たとえ自らが破産しようとも種痘を広げると決意ごうしやくし、豪商ごうしやうの援助を一切拒否する姿勢を貫き通した。

このため「京都除痘館」は、たちまち経営に行き詰まってしまふ。

そうして翌嘉永三年五月、鼎哉が五四歳で病没すると、経済的に破綻して絶苗、施設も断絶してしまふ。

同じ京でも、榎林栄建の経営はしつかりしていた。

豪商「鳩居堂」の支援を受け、種痘所となる「有心堂」の経営を続けた。それでも痘苗維持のためには、金子や菓子をばらまいて、親や子どもの歓心を買わなければならなかった。

大坂除痘館も、同様の苦境に陥っていた。

社中の者はひとり、ふたりと櫛の齒が抜けるように辞めていった。

それはある意味で当然の成り行きだったといえるだろう。

種痘の費用を取らないので、当然赤字経営が基本になる。

除痘館にのしかかってくる手間と費用は、膨大なものだった。

種痘後の状態を継続して見守る必要がある上に、植え継ぎのために再来院もさせなければならない。

その上、民衆からの評判も悪く、種痘に関わっているというだけで、本業の医業が成り立たなくなるといふ悪循環に陥ってしまった。

このように種痘は、とんでもない難事業だったのである。

それだけでなく、予防医学に対する庶民の理解がなかなか進まず、俗説に苦しめられるのは世の常であり、現代でも変わるところはない。

しかしそれでも、洪庵と社中の堅忍不拔の尽力で、「除痘館」の分院はじわじわと広がっていった。

そして気がつくとき、西日本の百八十カ所に種痘所が成立していた。そんな順調だった洪庵たちの前に立ちはだかったのが、旧弊の漢

方医の反発と、言い伝えの妄言もうげんや迷信たぐの類たぐ이었다。

「牛痘を打つと、牛の角が生えてくる」という迷信は特に強力だった。

神仏への信仰心が厚い庶民は、見慣れぬものには拒否反応を示す場合が多いものだ。

だがその時、洪庵は思いがけない援軍を得た。

ある日、洪庵は一通の書状を受け取った。

桑田立斎という差出人の名は、どこかで聞いた覚えがあるものの、思い出せない。

封を開けると、色鮮やかな錦絵にしきえが二枚出てきた。

絵に添えられた賛さんを読んだ洪庵の胸が、感動に震える。

——この手紙の主が以前、泰然殿がおっしゃっていた人物か。

長崎留学した洪庵と入れ違いに「日習堂」に入塾した桑田立斎はてんぼう天保十三年（一八四二）、小名木川おなきがわのほとりの深川西大工町にしだいくちように小児科医院を開業し、人痘種痘をしていた。

近くの御徒町和泉橋通りで本道（内科）を開業していた伊東玄朴おかもらいずみばしが、牛痘種痘術を施していると聞きつけ、痘苗をわけてもらい、嘉永二年十一月、洪庵とほぼ同時期に、自院で牛痘接種を始めた。

一年間で千人余りの子に接種し、善感九七四名という圧倒的な成

功を収めたという。

しかし彼は、浪速の洪庵と同様、住民の絶望的な無理解に苦しめられていた。

漢方医が密かに広めていた「牛痘を受けると角が生えてきて、牛の子になってしまう」という妄言を信じ、子を持つ親は「牛の角が生えてくるよりは、荒肌あばたの方がマシだ」などと言う。

いくら立齋が「荒肌あばたならまだよいが、死んでしまったら何にもならないのだぞ」と説得しても、一向に埒らちがあかない。

そこで苦心の末に考え出したのが、洪庵が手にした二枚の錦絵だった。

一枚は「牛痘児の凶」と題する絵で、金時きんときを模もした子どもが白牛にまたがり、手にした槍やりを突き出し、赤鬼のような疱瘡神ほうそうがみを退治するという、勇ましい図柄だ。

もう一枚は、武器を手にした「白神（はくしん＝ワクチン）」を先頭にしょうんにした新薬連合軍が、病魔の軍勢をなぎ倒す様を、紫雲しうんたなびく天から天照大御神あまてらすおみ、牛頭天王ごずてんのう、水天宮すいてんぐう、神田大明神かんだだいみょうじん、山王大権現さんのおだいごんげんなどの善神たちが頼もしげに眺めているという、派手派手しい錦絵だ。

手紙に添えられた私信には「牛痘を受け入れてもらうため、この錦絵を、種痘前の両親や子どもに配っており、大変好評です。よろしければ大坂の除痘館でもお使いください」とあった。

これは素晴らしい援軍になる、と直感した洪庵は、早速その絵を二代目中環なかつたまきを名乗っている、銅版画家の伊三郎いさぶろうのところへ持って行った。

伊三郎は、その絵を見るなり、こう言い放った。

「この絵を模写できるか、やて？ 『重訂解体新書』ちようていいかいたいしんしよで精密な人体

図を描いた儂わしを舐なめるなよ。原画以上の出来にしてみせたるで」

伊三郎は中天游てんゆうが亡くなった直後、二代目中環を名乗り中家の医家を継いでいた。

だが、遺児いじの耕介こうすけが長崎留学後の長州遊学から戻ったのを機に、医家の看板は耕介に返上し、本業の銅版画家に戻っていた。

中伊三郎は、大言壮語たいげんそうごに違わず、原画に負けず劣らぬ錦絵を数日で仕上げて、洪庵に届けてみせた。

以後、大坂除痘館でも、種痘前の親子に二枚の錦絵が配られるようになったのである。

桑田立斎あんせいは後の安政四年（一八五七）、蝦夷地えぞちで痘瘡とうそうが流行した際、幕府の命で、蝦夷地での種痘接種の責任者となり、六千人を超えるアイヌの人々に牛痘を接種し、「日本のジェンナー」と呼ばれた人物である。

こうして洪庵は、種痘の普及に全精力かたむを傾けていた。

あらゆる伝手を使い、種痘で得られた財は全て種痘事業に投入した。

そうして私財を投じて継痘に努める一方、種痘所の官営化かんえいかを目指した。

種痘所の前に立ちはだかった最大の問題は、接種を受ける民衆の無理解だった。

人々は牛痘の効果を頭から信じようとせず、神仏にすぎり、迷信にしがみついた。

そうした庶民の様子を、牛痘輸入に第一の功績があつたとされた佐賀藩匙医さじいの伊東玄朴は、次のように喝破かつぱしている。

「疱瘡の神とは誰が名付けん、悪魔外道の崇たりなすもの」

そんな問題を解消する手立ては、ふたつしか考えられなかった。

ひとつは、種痘の意義を周知徹底することだ。

それは著名な医家となった洪庵が率先して行なつたことで、成果が徐々に上がり始めていた。

もうひとつは、権威による支持である。

民衆は、お上の言葉には従順な者も多い。その点、大坂奉行が協力的なのは大きかった。

けれども、いくら大坂から申し立てても、江戸が動かなければ変革への道は遠い。

官営化の最大のメリットは、幕府が費用を負担してくれる点だ。痘苗を維持するため、社中の者は持ち出しを強いられ、そのため離脱する者も少なくない。

義弟の緒方郁蔵でさえ、体調を崩したことがきっかけで、社中から身を引いていた。だが洪庵は、彼らを責める気持ちになれない。

「幹が枯れては何にもならねえだろ」という泰然の言葉が胸を抉る。えぐ そうならないためにも、何としてもお上の支援が必要だった。

その頃の洪庵は、雨後の竹の子のように現れた「もぐり除痘館」にも苦慮していた。

高い費用を取り、いい加減な種痘を行ない、時に痘瘡に感染させてしまうような無責任な種痘を撲滅するぼくめつのも洪庵の責務だった。

その対策として、分苗する時に種痘法を教示し、義弟の緒方郁蔵が著した小冊子「散花錦囊」を指南書しなんしょとして与え、免状を発行するというやり方を採ることにした。

それは和蘭折衷派わらんせつちゆうはで、蘭学と比せば古い体質といえる「合水堂」のやり方を踏襲とうしゆうしたものだ。

だが所詮はその場のぎにすぎず、施設を恒久的こつきゆうてきに安定させるためには、やはり官許かんきよはどうしても必須だと思われた。

しかし蘭書の翻訳を事実上禁止している、頑迷蒙昧がんめいもうまいな幕府の上層部に、そんな見識が持てるはずもない。

絶望した洪庵が率いる適塾には、やがて新しい体制を志す青年たちが集い、倒幕開国を目指す志士たちの人材供給の場へと変質していく。

種痘の普及だけを一心に希った洪庵は、気がつくとも社会変革を望む時代の流れの最先端に立たされていた。

だが、お上の規則を守ることを何より大切にしていた洪庵の信念は固く、一切変質しなかった。

その結果、洪庵と、彼が率いる適塾の身心は、真つ二つに引き裂かれていく。それはまさしく、頑迷な時代によってもたらされた、大いなる悲劇だったのである。

(つづく)